幼年教育研究年報　第33巻　133－139
The Annural Research on Early Childhood, 2011

スウェーデンにおける就学前動物介在教育に関する研究
－ストックホルム市の就学前学校の実践から－

飯野　祐樹[1]・七木田　敦[2]・大野　歩[2]

The Study about Animal Assisted Education in Early Childhood Education in Sweden
－Considering from Forested Education with Mulle－

Yuki IINO[1], Atsushi NANAKIDA[2], Ayumi OHNO[2]

Abstract : In the early childhood education of our country, 'animal assisted education' has been situated as an important program for long years. However, almost all programs tend to be restricted only breeding of animals, and educational significance was not shown clearly against to each programs. So the purpose of this study is considering this point. Especially, in this study focusing to 'Forested Education with Mulle' which was carried out as a part of environmental education in early childhood education in Sweden, and tried to examine how 'animal assisted education' is put into this program. Mulle is a name of fairy who are made for this program, and taking a role which telling the children about the importance of nature and animals from the structure of a food chain. Regarding the method of this study, investigators went to the facility for early childhood education in Sweden, and carried out observation and interview to teachers. As a result, the meaningful implications were indicated about 1) how 'animal assisted education' situated into early childhood education, and 2) how each child face to breeding animals in the center.

Key Words : animal assisted education, Sweden, early childhood education, Mulle, food chain.

Ⅰ．はじめに

スウェーデンは、国土の約73.5％が森林に覆われた人口935万人の立憲君主国家であり、「社会福祉国家スウェーデン」、いわゆる、「スウェーデン・モデル」を確立したことで世界的に注目を集めている。北岡（2010）によれば、これらスウェーデンにおける一連の福祉政策は、スウェーデンの自然環境の厳しさのもとでの、互いの助け合いの精神から生まれた政策理念としてとらえられており、福祉国家としてのスウェーデンが誕生した背景には、人々と自然との共生という理念が少なからず寄与していたとの報告がなされている。

このようにスウェーデンにおいては、厳しい自然環境との共生の道を選択したことで、その国民性にも強く影響が与えられ、この点を反映するかのように、自然を中心に据えた教育プログラムが就学前教育の段階から数多く展開されている。中でも、スウェーデンの就学前教育においてユニークな実践を展開しているのが、FRILUFTSFRÄMJANDET（スウェーデン野外生活推進協会）協会である。FRILUFTSFRÄMJANDET協会での実践は子ども達が自然の中に身を投じることで獲得する、知性や感性を基に教育プログラムを構成しており、子ども達が一日の大半を園舎の外で自然と触れ合いながら過ごすという点において特徴がある。このプログラムは、近年、北欧を中心に盛んに実践がなされ、世界的にも注目が集まっている「森の幼稚園」と非常に類する点が多く見られるものの、子ども達が食事を取ったり、必要に応じて諸活動を取り行ったりすることを目的とした園舎が持たれて

1　広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2　広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

いる点において異なりがある。加えて、その教育内容において非常に興味深いのが、「森のムッレ教育」である。これは、ファンタジーを通して子ども達に環境の大切さを伝えるというスウェーデン独自の教育方法であり、1957年に誕生し60年代を通して全国的に広がっていった。このプログラムにおいて最も重視されているのが、「自然の循環」、つまりは、「生命空間の大切さ」を子ども達に伝えるということであり、その中でも昆虫や動物が森の生成において果たす役割の大切さがプログラムを通して伝えられることとなる。

翻って、わが国の就学前教育においても子ども達が動物の飼育や触れ合いを通して獲得する成長については長年に亘って重視されており、「動物介在教育」として需要の高い教育プログラムの一つとなっている。このプログラムの効果としては、子ども達の道徳性の芽生えや、人格的、或いは、精神的な成長が期待されており、これまでにも多くの論考において注目がなされていることからもその注目の高さがうかがえる(例えば、溝口，2007；谷田・木場，2004；井上・無藤，2009)。しかしながら、これら論考においては、「動物介在教育」を通して期待され得る子どもの成長に関しては詳細な検討が蓄積されているものの、上記したスウェーデンでの「森のムッレ教育」のように、「動物介在教育」と自然との融合、さらには、ファンタジーを絡めながらの「動物介在教育」というように、教育技法の観点から「動物介在教育」に対して分析を試みるという視角はほとんど見受けられない。これらの点をふまえれば、スウェーデンにおける「森のムッレ教育」は、わが国の「動物介在教育」に関して新たな視点を提供し得る教育技法であると考える。

そこで、本研究ではスウェーデンでの実地調査から、「森のムッレ教育」を基盤に置く「動物介在教育」がいかに展開されているのかを検討し、わが国の「動物介在教育」に示唆を得ることを目的とする。

II．方法

i．調査期間及び対象施設

2010年９月22日～９月30日にかけてストックホルム（スウェーデン）市郊外のＡ幼稚園において実地調査を実施した。Ａ幼稚園は、FRILUFTSFRÄMJANDET協会の傘下の施設であり、施設の前には湖があり（図１)、裏側には森が広がっている（図２）幼稚園であった。

図１

図２

ii．Ａ幼稚園の一日の流れ

Ａ幼稚園には、生後６カ月の乳児から就学前までの子ども約30名が通所しており、各年齢に別れて保育を受けている。子ども達が通園し終わると、園庭に出るために各自リュックを背負い、身支度を整える。その後、年齢別に集まり園庭に出発する（図３)。園庭に出ると集いが始まり、その日の予定等の話合いが対話形式で行われる（図４)。

図３

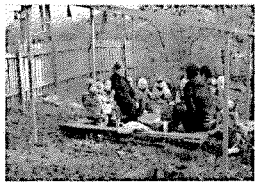


図４

乳児においても、幼児と同様に一日の大半を園庭で過ごすことは非常に興味深いことであった。図５に示したのは、乳児の就寝を目的に建てられた小屋であり、必要に応じて乳児はこの中で睡眠をとることとなる（図６)。

図５

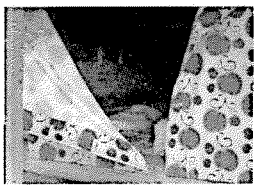


図６

Ａ幼稚園での保育プログラムは、外での自由遊びが中心となる。敷地内には園舎があるものの、そこに入るのは昼食やおやつ等の食事の時間に加え、天候が非常に悪い日のみに限っては園舎内で保育を行うとのことであった。

iii．環境構成

Ａ幼稚園の園庭には、各所に遊びに応じたコーナーが設けられており、わが国においては主

に保育室において多用されているコーナー保育の機能を園庭に設置している点は非常に興味深いことであった。例えば、木馬のコーナー（図7）や、ママゴトを中心とした「ごっこ遊び」が展開されているコーナー（図8）等が見受けられ、子ども達は好みの場所で遊びを展開することとなる。

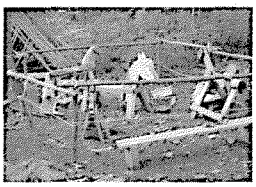


図7

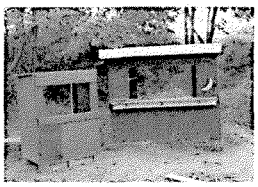


図8

Ⅲ．実地調査より

ⅰ．「森のムッレ教育」について

「森のムッレ教育」とはいかなる教育技法なのか。この点についてB保育者にインタビューを試みたところ以下の旨の回答が得られた。

「森のムッレ教育」において最も大切にされていたことは、自然の循環の仕組みを子ども達に伝えるということであり、その際、これら内容の伝達を担うこととなるのが、森の妖精ムッレ、湖の妖精ラクセ、そして、高山の妖精フェルティーナの3名の妖精である。このように、「森のムッレ教育」においては、スウェーデンの野外の自然を、森、湖、高山の3つのタイプに分類し、それぞれに対してシンボル的な妖精を位置付けることで、子ども達が自然を身近なものとして感じられるようにとの期待が込められている。

その方法は、保育施設ごとに若干の異なりがあり、例えば、実際に保育者がムッレに変装して子ども達の前に現れたり、素話を通して伝えたりなど複数の方法が全国で実施されている中にあって、A幼稚園では主に人形を用いて子ども達とムッレとの触れ合いを実践している（図9）。

図9　ムッレの人形

ⅱ．「森のムッレ教育」を通して

自由遊びの時間を通して子ども達は、様々な動物や昆虫との触れ合いの機会が持たれている様子が見受けられた。加えて、子ども達自身も積極的に昆虫や動物を探し出しており（図10）、それら動物に対する調べをリュックに常備してある図鑑（図11）を用いて行っている様子も見受けられた。

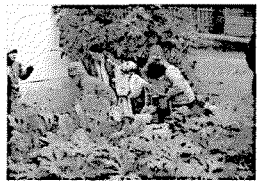


図10

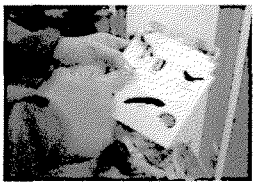


図11

「森のムッレ教育」では、これら子ども達が自由遊びの時間に触れ合った動物や昆虫を話題として取り上げながら、自然の循環の仕組みについての理解が深められる。例えば、以下に示すエピソード1は、ある子どもが「ナメクジ」を見つけたという話題をムッレ（人形を用いて保育者が会話を行う）に話した時のものである。

エピソード1：ナメクジを話題に

ムッレ：今日はどんなものを見つけたかな？
子ども：ナメクジがいたけど気持ちが悪かった…
ムッレ：気持ちが悪い？なんでかな？
子ども：だって、ヌメヌメしていたんだもん。
ムッレ：ナメクジはどこにいたのかな？
子ども：花壇の近くにいたよ。
ムッレ：（うなずくように）ははーん。それはたぶん、近くにあった花壇の花がナメクジさんにお願いごとをしていたんだな。
子ども：（不思議そうに）お願い事？
ムッレ：そう。お願い事だよ。みんな、花壇の花は咲いた後にはどうなるかな？
子ども：綺麗じゃなくなる。
ムッレ：じゃあ、綺麗になくなった後は？
子ども：無くなってしまう…
ムッレ：じゃあどこに行っちゃうのかな？
子ども：・・・・・（答えられずにいる）。
ムッレ：実は、花壇の花は咲き終わると僕(ムッレ)が住んでいる森の土の中に帰ってくるんだよ。
子ども：どうやって？
ムッレ：そのお手伝いをするのがナメクジさん、だ

から、花壇の花はナメクジさんにその時はヨロシクって言っていたんだと思うよ。

子ども：そうなんだ。じゃあ、土に帰ると花壇の花はどうなるの？死んじゃうの？

ムッレ：いいや。土に帰った花壇の花は、森の力(パワー)を一層強くさせてくれるんだ。そして、他の食物が育つのをそっと助けてくれることになんだ。

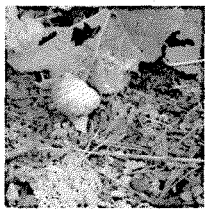
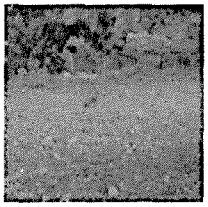
このエピソードでは、「子どもとナメクジとの関わり」を起点に、「花壇の花とナメクジとの関係」から、「ナメクジと森との関係」にまで話題を拡げ、子どもにとって忌諱の対象であったナメクジに対して価値の転換を保育者はムッレを通して試みようとしている様子がうかがえる。つまり、「森のムッレ教育」においては子ども達の実体験を基に、「子ども達と動物との関係」、或いは、「植物と動物との関係」というような繋がりに対して子ども達が気付くことで、自分達（子ども達）もその循環の構成要因であることを理解させていくことに本意が置かれているものと考える。

iii．動物や昆虫との触れ合い

具体的に子ども達は、A幼稚園においてどのような動物や昆虫と触れ合う機会を持っているのか。以下では、A幼稚園で見られた子どもと動物との触れ合いの場面に焦点を当て検討を行う。

iii-1．園庭での動物との触れ合いについて

まず、園庭での触れ合いについて。A幼稚園の園庭は裏の森と隣接していることもあり、各所に様々な動物が見られ、それぞれの場所で子ども達との触れ合いが生起している様子が見受けられた。

園庭で見られた動物	子どもとの触れ合いの様子
	毎朝園庭には様々な小鳥が訪れる。中には子ども達に慣れ親しんでいる小鳥もいて、これら小鳥に対して子ども達は自宅から持ってきた餌を与えている様子が見られた。
	子ども達は、様々な箇所の草をかき分けながらカタツムリを探している様子が見受けられた。手に取ったカタツムリが頭を出し入れしている様子に関心を示し、友達と共有している様子が見られた。
	園庭には時々、裏の森からウサギが訪れる。ウサギを見つけると子ども達は必至に駆け寄ろうとするが、中々近づくことはできない。この追いかけっこを子ども達は非常に楽しんでいるようであった。

A幼稚園において園庭での子どもと動物達との触れ合いは基本的に自由が許可されている。そのため、保育者は定期的に園庭の調査を実施し、子どもに対して有害な動物（例えば、毒蛇や毒クモ等）がいないか等を確認する機会を設けているとのことであった。また、野生動物と触れ合うことの意義についてはC保育者から下記のように語られた。

C保育者へのインタビューより

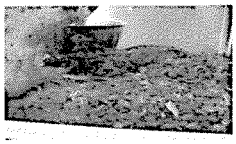
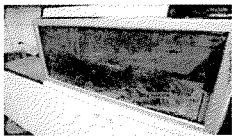
子ども達のほとんどは家庭でペットを飼っており、謂わば、手なずけられた動物と触れ合う機会を多く持っています。しかし、それら動物の姿が、本来の動物の姿かと問われれば疑問符がつくのではないでしょうか。つまり、動物は本能的に人間を脅威と感じていること、或いは、恐れる存在として感じていること、を野生動物との触れ合いを通じて子ども達に感じとってもらいたいのです。つまり、野生動物にとって我々人間がどのような存在なのかを子ども達には理解してもらえればと思っています。

このように、子ども達と野生動物との触れ合いは、動物と人間との本来の関係を見つめ直し、とらえ直す良い機会であるととらえられており、この経験を通して子ども達に動物への親し

みを一層深めてもらいたいとのことであった。

iii-2. 飼育動物との触れ合いについて

A幼稚園では、先述した野生の動物との触れ合いの機会と共に、子どもや保育者の手によって人工的に飼育がなされている動物との触れ合いの機会も設けられていた。

飼育されている動物	飼育に至った背景
	これは、1年前に森の入り口で傷ついているのを子ども達が見つけ（おそらくキツネに噛まれたのではないかとのことであった）、捕獲した蛇である。当初はどのようにしようかと迷ったが、ムッレを交えた話し合いによりA幼稚園において飼育することが決まった。蛇の飼育は子ども達が中心となって行い、今後は森に帰すのかどうかを子ども達と話し合うとのことであった。
	これは、約半年前に、子ども達と湖に行った際に水際で捕まえた小魚である。この小魚に対しても上記の蛇と同様に子ども達で、湖に帰すか施設に持って帰って飼育をするのかについて話し合う機会が持たれ、飼育することとなった。その結果、始めは3匹だった小魚が現在では12匹にまで増えたとのことで、この小魚も子どもが中心となって飼育を行っている。

このように、それぞれの飼育動物に関しては、その背景に明確な飼育に至った理由が付与されており、その決定は子ども達の合議において成り立っている点において共通していた。この点に対してD保育者からは以下のように語られた。

D保育者へのインタビューより

この施設では、基本的に保育者が飼育する動物を子ども達に用意することはまずありません。この施設で飼育する動物は、子ども達の合意形成の下で決定がなされ、その世話も子ども達が中心となって行うこととなっています。ですから我々保育者がその飼育に関して介入することはほとんどありません。もちろん、見守ることは重要な役割です。子ども達の意欲、つまりは、「飼育したい」、「育ててみたい」という気持ちや目的がなければ動物を飼育してもほとんど意味が無いのではないでしょうか。私はそう思って施設での動物飼育に取り組んでいます。

iii-3. 園外の動物との触れ合い

A幼稚園には、2カ月に1度の頻度で近くの農場から動物が連れてこられ、子ども達と触れ合う機会が設けられている。逆に、子ども達が農場に訪問する機会もあるとのことであった。この取り組みの目的は、普段の園生活で子ども達が触れ合うことができない動物と触れ合う機会を設けることにあり、これまでに馬、牛、ヤギ等がA幼稚園に来たとのことであった（図12・図13）。この会では、動物の専門家（主に農場主）が子ども達に説明を行った後、実際に動物に乗ったり、乳搾りの体験が行われたりするとのことであった。

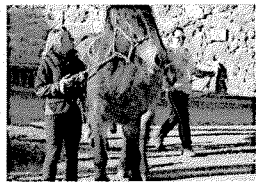


図12

図13

iv. 実践を通した「森のムッレ教育」

「森のムッレ教育」は食物連鎖に対する理解を通して子ども達が自然や動物との関わりを深めて行くプログラムであることは上述した通りである。A幼稚園においては、この仕組みを実際に子ども達が経験するというプログラムも設けられており、それは下記のような流れによって構成がなされていた。

A幼稚園の園庭では、ニワトリが飼育されており（ニワトリの飼育に関しても子ども達の合議によって決定した）、その世話も子ども達が中心となって行っている（図14）。ニワトリ小屋は、ニワトリが日中を過ごすアミ張りの部屋と、就寝時や孵卵の際に用いる部屋との2部屋の構成からなっている（図15）。

産み落とされた卵の中で、ニワトリが孵化させようとしない卵に限っては持出すことが許されており、園舎の調理室でその卵を用いて調理

図14

図15

が行われ、その調理品を子ども達が口にすることもあることもあるとのことであった。また、ニワトリ小屋の鶏糞が混じった土は、施設内の菜園で肥料として用いられることとなり、そこで栽培された野菜は子ども達が実際に口にしたり、ニワトリの餌として用いられたりすることとなる。この流れを示したのが図16である。

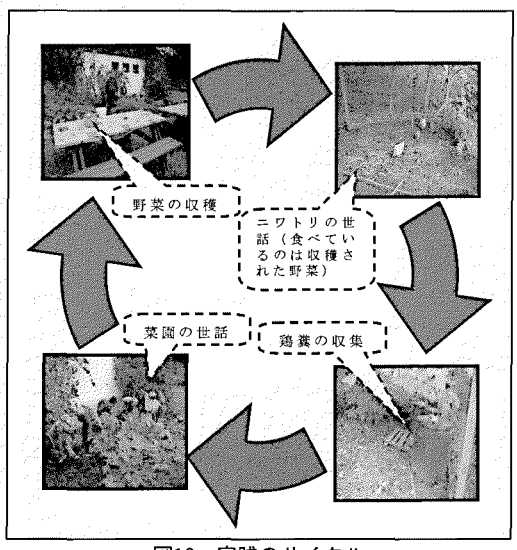


図16　実践のサイクル

このように、食物連鎖の一連の流れについて実践を通じて子ども達が経験することにより、その理解度は一層高まるとのことであった。つまり、「森のムッレ教育」においては、ムッレを介しながらファンタジー的要素を背景に獲得される知識理解の部分と、実践を通じて獲得する体験知との２つの理解によって構成がなされており、子ども達はこれら２つの理解を融合させながら、自分達と動物との関係性、自然との関係性、さらには、食物連鎖における自分達の位置付けというもの対して理解を深めていることが考えられる。

Ⅳ．考察

本研究では、スウェーデンの就学前教育において「動物介在教育」が、同国特有の教育技法である「森のムッレ教育」の中でいかに展開されているのかを実地調査を基に検討してきた。それによるとおよそ以下の２点がわが国の就学前教育での「動物介在教育」に対して示唆的な実践内容として挙げられるものと考える。

第一に、「動物介在教育」が体系的な枠組みの中で展開されていたという事実についてである。上記したように、Ａ幼稚園においては「森のムッレ教育」という教育技法を基盤とし、そのプログラムの一環として「動物介在教育」が位置付けられていた点は注目に値すると言えよう。つまり、動物は「自然をも含んだ社会環境の構成員」であり、子どもと動物との関係性は同じ社会で等しく生きるメンバー同士として意味づけられている。

翻って、わが国の就学前教育においては、「動物介在教育」をいかに教育プログラムの中で位置付けるのか、或いは、「動物介在教育」を通して何を子ども達に伝えたいのか、といった教育的意義が不明瞭なまま実践が展開されている感を持たずにはいれない。その結果、せっかくの「動物介在教育」の機会が「動物の世話」のみに終始するという実践も少なからず見受けられる。その要因としては、わが国の「動物介在教育」が、「子ども」と「飼育動物」との2者のみの限定された枠組みの中で「世話をする―される関係」によって展開される傾向にあるという事実が挙げられる。つまり、この2者のみの限定された枠組みを取り除き、新たな要素、例えば、Ａ幼稚園での実践のように、動物をも含めた一つの社会という観点から「自然」や「専門的知識」といった活動の幅を拡げられる要素を取り入れ、その中での「動物介在教育」の位置付けを明確にすることによって、わが国の「動物介在教育」の可能性は拡げられるものと考える。

第二に、飼育動物に対する意味づけ及び、その共有についてである。Ａ幼稚園で飼育されていたすべての動物には、飼育に至った理由が明確になされており、その理由についても保育者と子どもとの間で共有がなされていた。このように、飼育に至った背景及び目的が明確にされることによって、子どもたちが飼育動物と向き合う姿勢に積極性がもたらされる点にＡ幼稚園の保育者は意義を見出していることが示された。この事実は、わが国の就学前施設に対して飼育動物の選択方法という点で示唆を与え得るものになると考える。つまり、各保育施設が事

前に飼育動物を用意した後に、「動物介在教育」を開始するのではなく、飼育動物の選択にその起点を設定することによって、新たな「動物介在教育」の展開が広がるものと考える。その際、A幼稚園で見られたような子ども間での合議形成というものは重要な要素となるだろう。

引用・参考文献

井上美智子・無藤隆（2009）幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態（2）動物飼育の実態．教育福祉研究（35），1-7.

片山由美・川井蔦栄・高橋美知子・古橋　エツ子（2009）幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察：動物の世話をとおして．花園大学社会福祉学部研究紀要　17，13-21.

北岡孝義（2010）スウェーデンはなぜ強いのか―国家と企業の戦略を探る．PHP新書.

溝口綾子（2007）幼稚園における動物介在教育の実践―身近な動物とのふれあい体験を通して―．教材学研究，18，219-226.

岡部翠（2007）幼児のための環境教育―スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」．新評論.

佐藤由美（2007）幼稚園・保育園　森の保育で幼児から環境教育を―スウェーデンの「森のムッレ教室」と野外保育園．食農教育（56），154-159.

高見幸子・鏑木孝昭（2000）北欧スタイル快適エコ生活のすすめ―森の精ムッレに出逢ったスウェーデンの人々のビジョンとは．オーエス出版.

谷田創・木場　有紀（2004）幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性．日本獣医師会雑誌，57（9），543-548.

謝　辞

本研究のスウェーデンでの実地調査の際にはストックホルム大学（Stockholm University, Sweden）のIngrid Engdahl先生に施設訪問のコーディネートを始め、研究に関する貴重なご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。